様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ２３０７４

研究課題名（和文）ドイツ語圏モダニズム文学の「孤独死」イメージ―ツヴァイクとシュニッツラーを例に

研究課題名（英文）Images of "lonely death" in German literature of modernism - Zweig and Schnitzler

研究代表者
籠　碧（Kago, Midori）

三重大学・人文学部・特任講師（教育担当）

研究者番号：５０８４９０２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：モダニズムの時代、「孤独」という現象はしばしば審美的・陶酔的に表象されてきた。しかしツヴァイク作品の「孤独」のイメージは、明らかに政治的な態度と結びつけて描き出されている。とりわけ『永遠の兄の目』の、主人公が孤独に死にゆく結末は、作者のアンガジュマンを拒絶する態度と密接な関連を持っている。これを検討することで、「孤独」という現象を、抽象的なレベルでの価値判断から切り離して、「政治的態度」という具体的な社会行為と関連づけて提示する足がかりを得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　孤独という現象は現在、あるときは過度に審美化され、別の時には過剰に忌避される。モダニズムの時代、ドイツ語圏文学は孤独を審美的に表象することが多かった。これに対して本研究は、ツヴァイク作品の分析や翻訳を通して、孤独という現象を、抽象的なレベルの肯定・否定の価値判断から切り離し、むしろ政治的態度と結びつける基盤を提供した。
　さらに近年商業的レベルでも盛り上がりを見せるツヴァイクの文学は、政治参加に躊躇する心理を克明に写し出していることを示した。だからこそツヴァイクの文学はアクチュアリティを持ち得るのである。

研究成果の概要（英文）：In the age of modernism, "loneliness" is often represented aesthetically. However, the image of loneliness in Zweig's works is clearly associated with a political attitude. In particular, the ending of the novel "The Eyes of the Eternal Brother", in which the protagonist dies alone, is closely related to the author's attitude of rejecting political commitment. The images of loneliness described by Zweig are neither aesthetic nor abstract. By clarifying this, I have related the phenomenon of loneliness to the concrete social action of "political attitude".

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ文学　オーストリア文学　シュテファン・ツヴァイク　孤独　政治　ナチス・ドイツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はそもそも、「ドイツ語圏のモダニズム文学と精神医学」というテーマで研究を進めていた。精神医学は 19 世紀に制度として確立された。文学研究者 Anz（1977）は、ドイツ語圏のモダニズム文学（20 世紀初頭）、とりわけ表現主義の文学では狂気が称揚的に描かれており、それは精神医学へのアンチテーゼたりえている、と主張している。この見解は文学研究の中で定説にもなっている。これに対して申請者は、あらゆるものを相対化するモダニズム文学には「正常」と「狂気」という医学の設定した二項対立すら相対化する契機が潜んでおり、そうした作品、つまり表現主義的潮流を外れる作品に描かれた狂気表象こそが精神医学に対する真のアンチテーゼになり得るのではないか、という仮説を立てた。この仮説に基づき、シュテファン・ツヴァイク（1881～1942）、アルトゥル・シュニッツラー（1862～1931）、アルフレート・デーブリーン（1878～1957）ら、表現主義の潮流から多かれ少なかれ逸脱する作家たちの描き出す狂気表象を主な対象として、緻密な検討を行ってきた。そして、「称揚」とも「蔑視」とも異なる狂気に対する態度を取り出そうと試みていた。

この頃、「医学」というキーワードを介して現代日本の孤独死現象――医学の網の目からこぼれ落ちる生のあり方――に関心を持ち、関連書籍を読んでいた。そして、これまで研究対象として扱ったことのあるシュテファン・ツヴァイクとアルトゥル・シュニッツラーの作品に、「孤独」と「死」のモチーフが頻繁に描かれていることに関心を惹かれた。興味深いのは、どちらの作家も「一人で死ぬこと」を悲惨なものと考えているように思われなかったこと、かといって拙速かつ耽美的な孤独の称揚にも走っていないことだった。抽象的なレベルでの極端な否定にも肯定にも走らずにある現象を描写する、という点において、両者の「孤独」に対する態度は「狂気」への態度にも通じるところがあるように思われた。そしてこの描写を追究することが、現代の「孤独死」問題、あるいは単に「孤独」をめぐる言説に対して、一石を投じうるのではないかと考えた。

なお、「孤独」というテーマには大量の研究蓄積がありそうに思われる。実際ドイツ語文学をめぐって「孤独」を題に冠した各論は多いが、いずれも――狂気に関する研究と同じく――文学研究者のロマンティシズムが入り込むあまり、耽美的に孤独を称揚することに終始している感が否めない。「孤独」の現象を社会史的に捉え、客観的・包括的に論じたものは少ない。ニーチェを社会の「孤独観」の転換として提示した Möhrmann（1974）の著書が重要な参照点の一つである。2010 年には Gösweiner が、ドイツ現代文学における孤独表象に関する著書を発表している。この研究書は「孤独」の著者なりの定義から始まっているのだが、このことが示すのは、それだけ「孤独」に関する学術的な蓄積が実は小さいということだろう。蓄積が少ない原因の一つとして、「孤独」という現象そのものだけでは研究対象が拡散し収拾がつかなくなってしまうということが考えられる。

一方で申請者はここに「死」というモチーフを入れ込むことで、研究対象の引き締めを図ろうと考えた。Käser（2014）によれば、文学における医学のモチーフが盛んに論じられるようになったのは文学研究に文化史研究の手法が持ち込まれたカルチュラル・ターン以降のことであるが、医学と親和性のある「死」もまた比較的新しく、近年盛り上がりを見せているテーマである。2017 年にはヨーロッパの作家を対象とした「死」にまつわる論集（Berbig 他編）が二巻本で刊行されている。

しかし何より重要なのは、「孤独」と「死」の二つを結び付ける研究がいまだないことだ。ドイツ語圏では「孤独死」がそもそも問題化されていないため無理もないが、「孤独死」が人口に膾炙して久しい日本でもこうした研究は見当たらない。そこで申請者は、日本を拠点に活動する研究者ならではの視点としてこの二つを結び合わせ、研究に取り組もうと考えた。

２．研究の目的

「孤独」については古くから様々な言説が飛び交ってきた。とりわけ近年日本では「孤独死」が社会問題になっている。この現象は、社会学の立場からはそれをいかに予防するか、という観点から論じられることが多い。これに対して本研究は、ドイツ語文学研究の立場から、文学作品における「一人で死にゆく者の心情」に焦点を当てることを通してこの現象を新たな視点で捉え直すことを目的とする。

３．研究の方法

「孤独死」の現象を引き起こしていると言われるのは、産業化や都市化の進展による地縁の希薄化、家族制度の崩壊、そして少子高齢化である。そのため「孤独死」をドイツ語文学の領域から検討するに当たり、こうした諸問題のドイツ語圏における最も直接的な萌芽期と言えるモダニズムの時代の作品（1900 年前後からナチスが政権掌握する 1930 年代）を対象とする。特にシ

ュテファン・ツヴァイクとアルトゥル・シュニッツラーという、「孤独」や「死」をしばしば主題とした作家の小説を題材にする。
大勢の作家の中からシュニッツラーとツヴァイクを選びだす理由は、両名の「孤独」描写に特異なものがあると考えるからである。そもそも「孤独」はとりわけ感傷主義の時代以降、忌避すべきものとしてイメージされることが多かった。しかしモダニズムの時代に至って、ニーチェの思想の影響のもと、孤独は一転して「美的なもの、称揚されるべきもの」として表象された。シュニッツラーやツヴァイクはモダニズムを生きた作家である。それにもかかわらず両名の作品からは、孤独に死にゆくことに対する書き手のアンビヴァレントな態度、つまり単純な称揚でもなければ忌避でもない、曖昧な態度が垣間見えるのである。

具体的な方法は以下の通り。

（1）ツヴァイク
主人公が孤独に死ぬことが幸福に描かれ、また作者によって「信条告白」と呼ばれた中編小説『永遠の兄の目』（1922）を中心に考察する。古代インドの叙事詩を翻案した本作では、あらゆる罪を避けようとする主人公ヴィラータが最終的に人間と一切関わらず動物の世話をして生きることに幸せを見出し、一人きりで幸福に死んでいく。ヴィラータが叙事詩に名を残す有名人であるにもかかわらず誰からも忘れ去られ一人で死んだという設定に変えられていることは、作者にとって「一人で死ぬ」ことが重みを持っていた証拠である。本研究では孤独に関するエッセイを残したモンテーニュに対するツヴァイクの共感と反発に注目しつつ、後の伝記小説（の形を借りた自己告白的作品)『エラスムスの勝利と悲劇』(1934)、『カルヴァンと戦うカステリオン』(1936）と並ぶものとして本作を捉え直すことでツヴァイクの孤独に対する意識を探る。特に、社会への責任意識と孤独への偏愛の間での葛藤が彼の作品に一貫していることを明らかにする。それを経て『永遠の兄の目』に立ち返り、「一人で死ぬ」ことがポジティヴに描かれていることに対して考察を深める。

（2）シュニッツラー
中編小説『死』（1894）では、恋人に見捨てられた病気の主人公が絶望しながら一人で死ぬまでの心理が描かれている。ここでは孤独に死ぬことは一義的に悲惨な出来事として描かれている。一方、作者が自作の中で最も素晴らしいと自負したのちの長編小説『自由への道』(1908）では、妻子に先立たれた主人公が、誰も自分を知らない見知らぬ土地に幸福な気持ちで移住する。この小説の主人公は死なないのだが、自由に通じる唯一の道として孤独を捉えてこれを愛する人物として造形されている点に注目したい。本研究ではこの両作品の発表の間に恋人とその婚外子が死亡したという作者の伝記的要素も考慮に入れつつ両作品を比較し、作者の「孤独」と「死」に対するアンビヴァレントな態度の内実を分析する。

４．研究成果

モダニズムの時代、「孤独」はしばしば審美的に表象される。しかしツヴァイク作品の「孤独」のイメージは、明らかに政治的な態度と結びつけて描き出されている。とりわけ『永遠の兄の目』の、主人公が孤独に死にゆく結末は、翻案元のインドの聖典『バガヴァッド・ギーター』と比較してみれば、作者のアンガジュマンを拒絶する態度――ツヴァイクは、ナチス時代にあってもなお「政治への嫌悪」を理由に党派性を忌避して曖昧な態度をとり続け、存命中もその死後も、多くの批判を浴びた――と密接な関連を持っていることが分かる。このことを明らかにすることで、「孤独」という現象を、抽象的なレベルで否定することからも肯定することからも離れて、「政治的態度」という、具体的な社会行為と関連づけて提示する足がかりを得た。この成果を学会で発表した。この作品における政治と孤独の関係性をより具体的に描き出すためには、さらなる詳しい検討が必要と考えている。
なお文学研究では通俗作家として顧みられることの少ないツヴァイクは昨今、商業レベルで再注目を集めている。さらに日本の大学では、卒業論文のテーマに選ぶ学生も増えている。多くの日本の文学研究者はその理由を単純に「話の面白さ」に見ているが、研究を進めるうち、激変する社会を生きる若者たちの興味を惹きつけているのはむしろ、作品に落とし込まれた政治参加への躊躇に対する共鳴・反発ではないかと考えるに至った。申請者は 2020 年に、ツヴァイクの中編小説『永遠の兄の目』の邦訳を、ツヴァイク・アンソロジー『聖伝』（幻戯書房）の一篇として刊行する機会を得た。このときに書き下ろした訳者解題は、この見解を出発点にしている。そこで提示したのは、主人公の煮え切らない態度、最終的に人との関わりを断ち切る態度が、現代日本の中流階級の人々の政治参加に対する消極性に通じている、という見解である。現在検討しているのは、この見解をさらに発展させて、ツヴァイクの政治に対する消極的態度をより長いスパンで捉えることである。『永遠の兄の目』分析のあとの研究として具体的に構想しているのは、長編小説『心の焦燥』（1939）など、純然たる心理小説と見なされてそもそも政治とは関連付けられない作品にも、政治性の痕跡を見いだすことである。
政治を嫌い、消極的な姿勢を見せたドイツ語文学の作家はもちろん大勢いる。積極的な作家を見つけ出すことの方が難しい。そんな中でとりわけツヴァイクが興味深く、また特異でもあるの

は、『永遠の兄の目』の孤独表象からも分かるように、審美的・陶酔的な世界に逃げ込む道を選ばず、むしろ政治参加に躊躇する心情それ自体を克明に描いたことだと考える。しかもツヴァイクはこの問題意識を持ち続け、「政治参加への戸惑い」の心情を、生涯に亘って描き続けたと考えている。今後はツヴァイクの姿勢の時代的変遷を作品に即して追い、そのアクチュアリティを提示したい。

上記の通り、研究を進めるうちにツヴァイクの「孤独と政治」に興味の重心が移り、「死」のモチーフの研究や、そもそもシュニッツラーに関する研究がおろそかになってしまった。また、コロナ禍で授業形態が大きく変化したことや文献へのアクセスが困難になったことで、思うように研究を進められなかったのも事実である。しかしいずれにせよこの二年間で、今後のツヴァイク研究の方向性を描き、足がかりを得ることができた。

なお採択期間中に、精神医学・狂気に関する研究をまとめ、博士論文として提出することができたことも追記する。この博士論文は、「医学」というテーマや「ある現象に対する書き手のアンビヴァレントな態度を探る」という点で、孤独研究と通じている。目下のところは上述の通りツヴァイクの研究を進めるつもりだが、精神医学研究もライフワークとして続けていきたい。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

1．著者名 籠碧	4．巻 1
2．論文標題 20世紀前半ドイツ語圏文学における「狂気」のイメージ ― シュニッツラー、デーブリーン、ツヴァイク ―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 学位論文（京都大学大学院文学研究科）	6．最初と最後の頁 1-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 籠碧
2．発表標題 シュテファン・ツヴァイク『永遠の兄の目』における「孤独」のイメージについて
3．学会等名 日本独文学会京都支部春季研究発表会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 シュテファン・ツヴァイク（訳：宇和川雄、籠碧）	4．発行年 2020年
2．出版社 幻戯書房	5．総ページ数 304
3．書名 聖伝	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関